

1. プーチンの野望

2月24日はロシアがウクライナ侵攻を初めた日です。それから1か月あまり。戦争が終結する日は見えていません。今どきこのようなことが起ころうとはだれが想像していたのでしょうか？

ウクライナではすでに数千人の死者数があり、それを逃れるために数百万人が国外へ逃亡している現実。世界中がコロナ禍で困惑しているときに、この戦争被害。ウクライナの人々の惨状はとて見えていられない状況です。

今回の戦争の大元は、独裁者プーチンの野望からきていることは明らかです。独裁者とは、すべてのことが自分の思いのままになるという幻想を抱き、その実現のためにはどのような手段もいとわない人のことです。まさに北朝鮮とまったく変わらない状況ですね。

そもそも世界最大の面積を誇るソ連という国が崩壊したのが30年前。かつてのソ連という大連邦国家をまた再建したいというプーチンの野望が、今回の他国への侵略になったというのが本音でしょうか。このようなことが今の世の中で許されるはずはありません。ウクライナもソ連から独立した人口4千万人を超える立派な国です。ましてや首都キエフは、かつてのソ連が誕生した発祥の地であり、歴史的な建造物がたくさんあるにも関わらず、その都市を砲弾が飛び交う現状は、ウクライナ人はいうまでもなくロシア人にとっても、まさに内臓をえぐられる思いではないのでしょうか。

2. 独裁者を生む背景

プーチンは大統領の座についてもう20年以上になります。まずはこのような長期政権が許されるロシアという国自体を疑います。本日の新聞記事にも同じようなことが書かれていました。ロシア軍幹部がその現状をプーチンを恐れ、率直に伝えられないとのことでした。これはまさにワンマン社長に部下が何も言えないのとまったく同じ構図ですね。経営がうまくいっているうちはよいのですが、世情や業界の関係で予想だにしない悪い状況に陥った時に、いっさい聞く耳を持たないワンマン社長であったら、その後の経営はまずは保証されないケースが少なくありません。

ソ連崩壊で共産主義は断ち切られたはずでしたが、今回の戦争で今なお厳然と存在していました。その意味では8年任期の米国大統領制は的を得ています。しかも任期4年の中間選挙もありますから業績次第で4年で打ち切りもあり得ます。

プーチンは貧しい育ちで苦勞して大学に入り、その後 KGB-国家保安委員会に入りましたがパットせず、ソ連崩壊時に、サンクトペテルブルク市長に気に入られ、その後運よく一気に大統領まで上り詰めました。よくありがちですが、苦勞してつかんだ地位は一切譲りたくない、人間の欲望むき出しそのもの人間性だということがわかります。

3. 核の脅威

ロシア軍にチェルノブイリ原発が占領されたニュースは世界に衝撃を与えました。我が国も福島原発の例がありますから、他人ごとではありません。チェルノブイリ原発事故は、福島の数十倍も放射能が拡大飛散した世界最大の事故でした。当時のソ連はこの原発事故を隠し、なんと北欧のフィンランドあたりから放射能漏れを指摘されるまでその事実をひた隠し、その後原発事故の公表に

踏み切った背景があります。事故発生時、首都キエフの街では、上半身裸で日光浴を楽しむ市民が数多くいて、その後の原発事故の公表で初めて放射能の恐ろしさを知り、多くの人が被爆者となってしまいました。

プーチンは核の脅威をちらつかせ、ウクライナや西側諸国にウクライナ侵攻の正当性を主張していますが、この行為はまるで“やくざの恫喝”にそっくりですね。

世界で唯一の被爆国である我が国は、約77年前の核の恐ろしさを痛いほど知っています。たった一発の核弾頭が広島、長崎に投下されただけで、あれだけの甚大な被害を与えるわけですから、今もし核戦争が起こったら地球は丸ごと破壊され、世界中が放射能で汚染され、人々が行き場を失い生活できなくなってしまうでしょう。たった一人の独裁者に世界の人々が翻弄されるなんて、許されてよいはずはありません。

世界には200に迫る国々があり、77億人が生活しています。であればいろいろな人々の考えがあり、時には意見が食い違うことがしばしばでしょう。しかしお互いに協調し合い、地球人として共生するにはどうするかを考え行動するのが、国のトップに与えられた責務だと思います。

< DAS ジャパンから >

● ISO 権威のつぶやき

半年ほど前から代表の萩原によるエッセイが DAS ジャパン HP の「ISO 権威のつぶやき」に掲載されています。現代の世相に焦点を当てた興味深い内容だと思われるので、どうぞご一読ください。

「100万円の文書通信交通費」「縦割り行政の弊害」「ローカル線の廃線」「日米地位協定」
「医療従事者への待遇」ほか

● リモート審査について

現在弊機関では、認証企業様にはリモート審査にて対応しています。リモートツールについては「SKYPE」を活用していますが、各社独自の使い慣れたツールがあれば、そちらを優先しています。コロナの感染を警戒しての措置ですが、蔓延防止対策が解消されたとはいえ、まだまだ予断を許さない状況が続いております。本来のISO審査は、「現場、現実を客観的な証拠で確認する」のが基本ですから、順次現場審査に切り替える予定です。

一部リモート審査の継続を希望される企業様もおられますが、今回はあくまでもコロナ禍の対応ですので限界があり、ご容赦ください。(英国本部からは現地審査を最優先との要求です)

(編集責任者 萩原由利)



英国系 ISO 認証機関 DAS ジャパン(株)

代表取締役 萩原睦幸

東京都豊島区東池袋 3-20-16-503

info@das-japan.jp

<http://www.das-japan.jp>